

羅浮山の現地調査の概要

鈴木健郎

1. 調査日程・調査地・調査人員

中国の洞天および山岳信仰の現地調査として、2012年9月4日～11日にかけて、湖南省の南岳衡山および広東省博羅県の羅浮山の調査をおこなった。日本出発から帰国までの日程および参加者は以下のとおりである（大形徹・鈴木健郎・土屋昌明・森瑞枝の4名は9月4日に日本から中国へ向かい、別件で中国滞在中の二階堂善弘・志賀市子が9月7日に広州で合流した）。本稿では羅浮山の調査について報告する。今回の調査では、長年にわたり酥醪観を住持された黄誠倫道長とその弟子の方々（現在は羅浮山麓の東岳廟および羅浮山酥醪院道同図書館を拠点とされている）に多大な協力をいただいた。特にここに記し深く感謝申し上げる次第である。

2012年9月4日

土屋昌明・森瑞枝・鈴木健郎	東京羽田→北京→長沙
大形徹	大阪→広州→長沙
長沙泊	

9月5日

土屋・大形・森・鈴木	長沙→衡陽（南岳鎮） 南岳廟を調査
衡陽泊	

9月6日

土屋・大形・森・鈴木	南岳調査
衡陽泊	

9月7日

土屋・大形・森・鈴木	衡陽→長沙→広州
二階堂善弘・志賀市子	広州にて合流
広州泊	

9月8日

土屋・大形・森・二階堂・志賀・鈴木	広州→羅浮山
羅浮山泊	

注1…羅浮山志として、明・陳榘の『羅浮志』、清・宋廣業の『羅浮山志會編』、清・陳銘珪（酥醪觀の道士、「酥醪洞主」とも称す）の『浮山志』、清・九龍真逸（陳銘珪の子）の『羅浮志補』を参照。

注2…茅山の洞天調査については『洞天福地研究』第4号所収の廣瀬直記「蘇州句容洞天福地調査記録」、土屋昌明「華陽洞天門の認識から三十二小洞天良常山洞へ」、陶金「茅山宗教空間の秩序・歴史的発展のコンテクストの探求と現況」を参照。

注3…葛洪の羅浮山における事跡については、王承文「葛洪晩年隱居羅浮山事跡釋證——以東晉袁宏《羅浮記》為中心」（『道家文化研究』第21輯、三聯出版社、2006年）を参照。葛氏の活動と江南道教の形成については、小林正美『六朝道教史研究』創文社を参照。葛洪の「四庵」伝説と酥醪觀などの関係の問題点については、黎志添『廣東地方道教研究』中文大學出版社、2007年の第三章の注174を参照。

注4…白玉蟾の生卒年および遍歴については、鈴木健郎「白玉蟾と道教聖地」『東方宗教』120号、2012年を参照。「羅浮翠虛吟」は嘉定壬申（1212年）羅浮山における陳楠から白玉蟾への内丹と雷法の伝授、『翠虛陳真人得法記』は同年

9月9日

土屋・大形・森・二階堂・志賀・鈴木

羅浮山調査

羅浮山泊

9月10日

大形

広州→大阪

森

広州→東京

土屋・志賀・二階堂・鈴木

羅浮山調査、羅浮山泊

9月11日

土屋・志賀・鈴木

羅浮山→広州→東京

二階堂

別件で移動

2. 羅浮山について

羅浮山は、広東省広州市の博羅県（・増城県・龍門県）に位置する。司馬承禎の体系では十大洞天の第七洞天「羅浮山洞」「朱明耀真之天」である。「中国十大名山」、「嶺南第一山」とも称される。主峰の飛雲頂（海拔1296メートル）をはじめとして主に花崗岩から成る山の連なりで、水流・瀑布・洞窟・植物・鉱物が豊富であるため、古来より多くの方士や道士・僧侶が鍊丹や修道の地としたと伝えられる。羅浮志など諸文献には、秦の安期生、漢の朱靈芝・陰長生など多くの方士・仙人・道士が羅浮山で活動したとする伝説が虚実とりまぜて記されており*1、現在までこれに基づく信仰や礼拝がおこなわれている。

茅山（句容）*2の近辺で金丹道の活動をおこなっていた東晋の葛洪（稚川・抱朴子、283～343）は、咸和年間（326～334）金丹の材料を求めて句漏県（現在の広西壮族自治区）へ赴く途中、引きとめられて羅浮山に隠棲して鍊丹をおこなったと伝えられ（『晋書』列伝42など）、現在の羅浮山にも葛洪ゆかりの遺跡が多数存在し、また葛洪が羅浮山の東西南北に「四庵」（孤青・白鶴・都虚・酥醪）を設け、これが現存の沖虚觀や酥醪觀の基であるとされるが、宋代より前の文献には確実な記録はないようである*3。

南宋の白玉蟾（1194～？）は、嘉定壬申（1212年）～嘉定乙亥（1215年）頃に、羅浮山で陳楠（1171？～1213？）から「内丹」と「雷法」の奥義を伝授されている*4。白玉蟾はその後、武夷山など各地の山河や道觀を遍歴して旺盛な活動を展開するが、寶慶丁亥（1227年）にも羅浮山を訪れて「知沖虚觀事」道士の鄒思正（鄒師正のことらしい）のために「羅浮山慶雲記」（道藏精華『白玉蟾全集』243頁）を書いている。

金丹道の代表格である葛洪、宋代以降の道教史の中核である内丹と雷法を大成した陳楠・白玉蟾という、道教史の画期を成す人物たちが羅浮山を重要な活動拠点としていた。また、羅浮山では六朝以来の仏教の活動も盛んであり多くの仏教寺院が存在し、宋代以降には蘇軾など文人士大夫の来訪や儒学の書院も多く、周辺各地域と連結した宗教的・文化的なセンターとして機能していた様子がうかがえる*5。

現存の羅浮山の道観は、戦中や文化大革命期に壊滅的な打撃を受けた後に復興したものであり、復興にあたっては香港圓玄学院の援助が入っている*6。

また現在、羅浮山周辺の大規模な観光開発・リゾート化が進行中である。実際に来てみてはじめてわかったことであるが、今回の調査で宿泊したホテルは羅浮山のすぐ麓に建造された巨大なリゾートホテルで、羅浮山上からもその存在がいやおうなく目に入るほどのものであった。古来の宗教聖地が文化遺産・観光資源化するとともに、そこを聖地として存立させる景観構成自体が変容してしまうほどの観光開発が進行しつつある状況がある。羅浮山の宗教文化や伝統の在り方がどのように維持・変容してゆくことになるのか関心が持たれるところである。

3. 羅浮山の状況

9月8日、広州から車で移動し、羅浮山麓の東岳廟および羅浮山酥醪院道同図書館を見学し、黄誠倫道長にインタビューをおこなった。黄道長は幼くして入道し、革命と激動の時代を経て近年まで長く酥醪観を住持した道士である。調査時点では酥醪観をめぐる係争が発生しており、黄道長は親しい弟子たちとともに羅浮山酥醪院道同図書館を主な拠点として宗教活動を継続していた。

黄道長の紹介で、まず東嶽廟を見学し聞き取り調査をおこなった。清の乾隆年間に創建された東嶽廟であるが、内部には東嶽大帝とともに慈航普渡と月老遷翁が祀られており、正統的な宗教と民間宗教の習合が見られる（写真01から07 写真は紙面の都合上、86頁にまとめた）。

つづいて、羅浮山酥醪院道同図書館にて、黄道長より酥醪観の歴史、現在の黄道長の宗教活動などについて、話をうかがった（写真08から14、87頁）。

翌9月9日から10日にかけて、沖虚観・朱明洞天・蓬莱洞・胡蝶洞・泉源洞、酥醪観、華首寺、黄龍宮などを調査した。

羅浮山は道観や寺院の復興と観光開発が進行中であり、羅浮山の南麓に位置する「羅浮山風景区」の入口には「第七大洞天」の文字が刻まれ、観光案内所も整備されている（写真15・16、88頁）。

入口から沖虚観へ向かって進んでゆくと、白蓮湖から羅浮山を望むロケーションとなっており、白蓮湖の北部には蘇軾が何仙姑と李鉄拐に遭遇したとい

の「都天大雷法」の伝授を記す。『静餘玄問』は嘉定六年（1213年）四月十四日に陳楠が「水解」したことを記すが、「雲遊歌」は嘉定癸酉（1213年）に、「謝仙師寄書詞」は嘉定癸酉（1213年）秋と嘉定乙亥（1215年）春に、陳楠から白玉蟾への内丹の伝授を記す。

注5…清代以降の羅浮山の道教・道観の活動については、黎志添『広東地方道教研究』中文大学出版社、2007年および『洞天福地研究』第4号に掲載の志賀市子「近代の羅浮山と嶺南道教」を参照。

注6…奈良行博『道教聖地』平河出版社1998年の「羅浮山」の項を参照。1988年、1992年の羅浮山の状況が写真とともに詳しく報告されている。

注7…黎志添『廣東地方道教研究』第三章「清代廣東全真教道觀考」参照。

注8…奈良行博『道教聖地』「羅浮山」参照。

注9…現在の羅浮山の信仰と「道教史」における自己認識のようすを、頼保栄・張尚仁・劉細雅・張寧編著『羅浮弘道』広東省出版集團・花城出版社、2007年、および王麗英『道教南伝与嶺南文化』華中師範大学出版社、2006年などにうかがうことができる。

注10…白玉蟾「贈鄒師正道人」吾師有道貌、山水箇中人。無着故無累、是清還是眞。煙霞供嘯咏、泉石淪精神。何日分峰隱、誅茅願卜鄰。（『羅浮志』『羅浮山志會編』所収）。東阜治鳳「羅浮沖虛觀壁間紫清道人詩筆因用贈鄒知觀韻作寄」（『精華』白玉蟾全集・下1173頁）。

う伝説を有する「会仙橋」がある（写真17）。

歩いてすぐに沖虚観に到着する。沖虚観は、葛洪の南庵（都虚）に由来するとされる道観である。唐の天寶年間（742～755）には毎年二人の道士の伝度が認められ、北宋の元祐二年（1087年）に「沖虚」の賜額によってそれまでの「都虚」あるいは「玄虚」の呼称が変更され、明代には何度か重修されたが、明末から清にかけて衰え、清の康熙年間になって全真教の道士によって再興され^{*7}、清末以来の革命と戦乱と文革による破壊を経て1980年代から復興が開始し^{*8}、現在の活発な宗教活動に至っている^{*9}。現在も葛洪ゆかりの遺跡が残り、信仰を集めている（写真18から21）。沖虚観内には博羅県道教協会が置かれている。

北宋の「沖虚」の賜額から40年を経た南宋の寶慶丁亥（1227年）に、白玉蟾が「知沖虚観事」道士の鄒思正（鄒師正）のために書いた「羅浮山慶雲記」（道蔵精華『白玉蟾全集』243頁）には^{*10}、

淳熙改元（1174）十月既望、惠州守臣王寧奉天子（孝宗）命、蔵醮事於羅浮山。山即十大洞天之一、朱明曜真之府也。先是唐天成中洞出古劍、迹其篆文、已應太祖皇帝丁亥聖君之識。我宋受命、時遣中使奉金龍玉簡之典、歲修國醮著在令甲。孝宗皇帝始登大寶、爰致初敬。是日也、御香既上、蔵事薦成、歩虚升聞、環佩作序、天容紺碧、風日清美、珍禽舞、馴鹿悅、仙花揺草、滿洞芳妍。醮壇之西北隅、有五彩光華出焉、上亘霄昊、是謂卿雲。輪困郁麗、華景繽紛、中有金龍、徊翔翫郁。天人交慶、實應太平。天子。太平無象也、然而瑞慶之來、亦於其人、不於其天。天意以之昭格、山川於焉出雲。雲物精浸、尚登臺以課之、建官以紀之、秉筆以書之。自祥符初泰山慶雲現、今焉復應、猗歟盛哉。河清嶽潤、信有其時。

寶慶丁亥（1227）、道士鄒思正（鄒師正）該覃恩霈、州家檄之知沖虚観事。興懷休符、命為記文而繫之銘曰、「太祖之潜龍也、古劍出焉、孝宗之飛龍也、慶雲翔焉、劍所以化龍於地、雲所以從龍於天」。易曰、「雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩」。

とあり、羅浮山が十大洞天の一つであると意識されていたこと、唐の太祖と宋の孝宗の時の羅浮山における瑞祥出現が並べられて皇帝権力の聖化・正統化がおこなわれていたこと、投龍簡など国家的な規模の道教儀礼がおこなわれる重要な聖地として機能していたことなどがわかる。

鄒師正の『羅浮山指掌圖記』（『羅浮山志會編』卷一「名勝一」）には、

名山異境、散布人寰、其知名者有十大洞天。五在江浙、三在梁益、輿夫洛京一、惠陽一而已。洛京衣冠都會之地、江浙梁益舟車奔湊之鄉、其林泉之

美、登覽之便、著於有聞、蓋地勢使然也。獨羅浮邈處海上、天下想聞之而恨不至其地、間有能至之者、非逸世高蹈之士、非希仙慕道之人。山之高且三千六百丈、地之袤直五百里、峰巒之多四百三十二、溪澗川源有不可勝數者。是雖長年隱者猶未易遍覽、而況士大夫來游者暫至倏還旬日而罷又安能周知。指掌圖所以作也。

とあり、十大洞天の中では羅浮は都から遠方であるにもかかわらずはるばる訪れる人士のために、ガイドマップとして「羅浮山指掌圖」を作ったことがわかる。後続の文章には、遊覧ルートと名所旧跡が大量に列挙されており、宋代の羅浮には、道教や仏教の修行地としての性格とともに、いわば宗教ツーリズム的な要素があったことがわかる。

沖虚観から少し歩くと朱明洞に着く。安期生、朱壺芝、葛洪に関する伝承があり、白玉蟾も訪れている。明の湛若水が講義をした書院があった場所でもあり、人民解放軍の幹部が居住した「元帥樓」もある（写真 22）。

そこから山道を登ってゆくと胡蝶洞がある。洞窟の入り口は山の斜面に向かって開けている（写真 23・24、89 頁）。

そこから少し下ったところに泉源洞がある（写真 25・26）。

さらに山道を行くと蓬萊洞へ着く。大きな洞窟であるがコンクリートで補強工事がされている（写真 27）。

その後、ロープウェイと徒歩で伏虎岩へ至った。そこから、南側の地形が一望できる（写真 29・30）^{*11}。

再びロープウェイで下山してから車で移動し、酥醪観へ向かった。酥醪観は既述の様に葛洪の北庵に由来するとされる道観である^{*12}。「神霄寶殿」に雷祖、「葛洪北庵」に葛洪、「純陽寶殿」に呂祖が祀られるほか、何仙姑、安期生、張天師なども祀られている。なお調査時には大規模な改修工事が進行中であった（写真 32 から 40、90・91 頁）。

翌 9 月 10 日、華首寺、黄龍宮（金沙洞）、南樓寺（朝元洞）を調査した（車で移動）。それぞれ近年の建築によってその面貌は一新している。最初に華首寺（仏教寺院）を調査した（写真 41 から 45）。

次いで黄龍宮を調査した。羅浮山の西南端に位置し、金沙洞と呼ばれた場所である。1996 年に大規模な工事が始まり、その後も建築が増え続け調査時も継続中であった（写真 46 から 51）。

最後に南樓寺を調査した。現在の南樓寺はかつての朝元洞である（写真 52・53）^{*13}。

以上で今回の調査を完了し、翌 9 月 11 日、広州経由で帰国した。

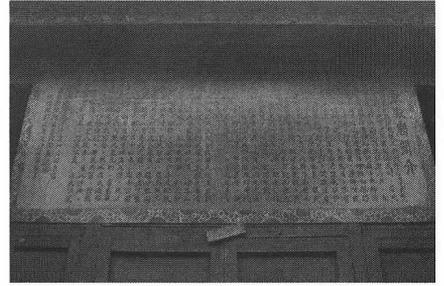
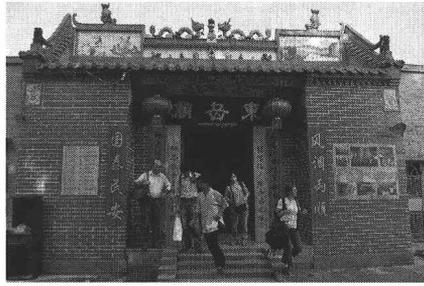
注 11…白玉蟾「羅浮山上過鉄橋」飛雲頂下見羅浮、五色珍禽繞石樓。行過鉄橋猿嘯罷、稚川丹竈冷[風+搜の手篇なし][風+搜の手篇なし]。〔『精華』白玉蟾全集・下 818 頁〕。白玉蟾「飛雲頂」飛雲頂上閣闌、千夜半南溟出玉盤。卷起水簾三百尺、松風吹動鐵橋寒。〔『羅浮志』卷十、『羅浮山志会編』卷十九所収〕

注 12…近代における酥醪観の歴史、陳銘珪による再興については志賀市子「近代の羅浮山と嶺南道教」〔『洞天福地研究』第 4 号〕を参照。

注 13…この地に「一中精舎」があったことについては、志賀市子「近代の羅浮山と嶺南道教」〔『洞天福地研究』第 4 号〕を参照。

写真、左上から右下へ

- 01 東嶽廟
- 02 東嶽廟の簡介
- 03 東嶽大帝
- 04 慈航普渡
- 05 月老遷翁
- 06 2012年神誕表
- 07 東嶽廟にて



2012年壬辰岁神誕表

大帝 正月初二日 公曆 2012年1月22日	農曆日 正月初二
東岳 正月初三日 公曆 2012年1月23日	農曆日 正月初三
普渡 正月初六日 公曆 2012年1月26日	農曆日 正月初六
月老 正月十六日 公曆 2012年2月5日	農曆日 正月十六
二月 二月十五日 公曆 2012年2月4日	農曆日 二月十五
三月 三月十六日 公曆 2012年3月5日	農曆日 三月十六
四月 四月十五日 公曆 2012年4月4日	農曆日 四月十五
五月 五月十六日 公曆 2012年5月5日	農曆日 五月十六
六月 六月十六日 公曆 2012年6月5日	農曆日 六月十六
七月 七月十六日 公曆 2012年7月5日	農曆日 七月十六
八月 八月十六日 公曆 2012年8月5日	農曆日 八月十六
九月 九月十六日 公曆 2012年9月5日	農曆日 九月十六
十月 十月十六日 公曆 2012年10月5日	農曆日 十月十六
十一月 十一月十六日 公曆 2012年11月5日	農曆日 十一月十六
十二月 十二月十六日 公曆 2012年12月5日	農曆日 十二月十六

東嶽廟 廣東省揭陽市普寧市東嶽廟 電話：1372542220





08 羅浮山酥醪院道同図書館

09 黄道長

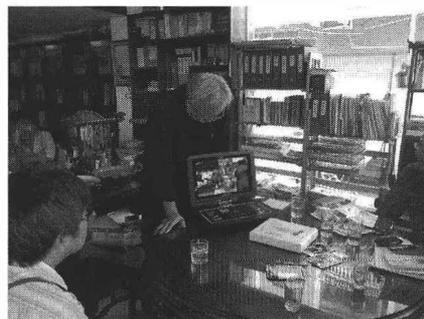
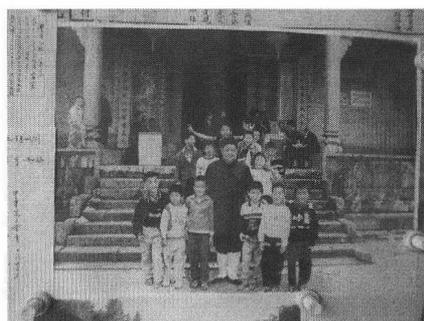
10 道同図書館入口付近

11 羅浮山酥醪院道同図書館内の壁に貼られている度牒（中華民国期、1946年）。全真教龍門派の伝承が示されている。

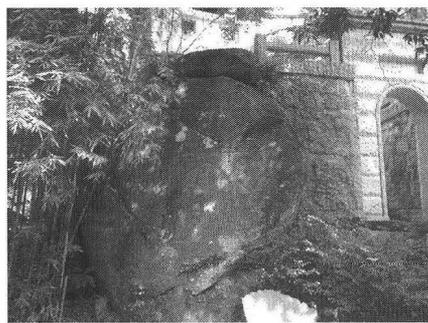
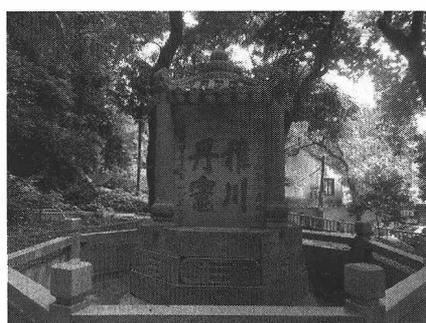
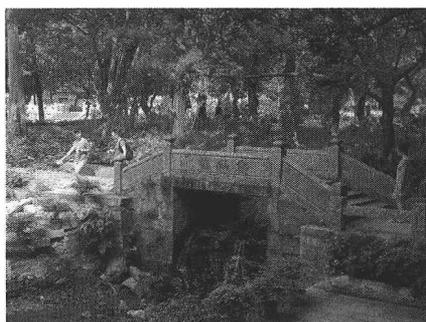
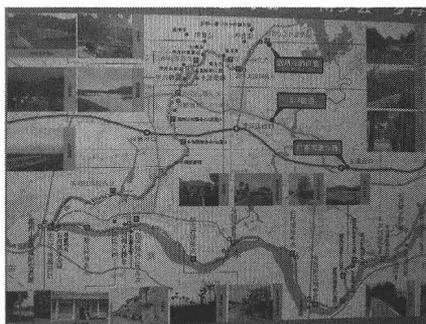
12 度牒

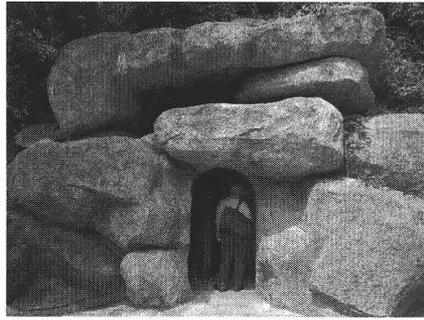
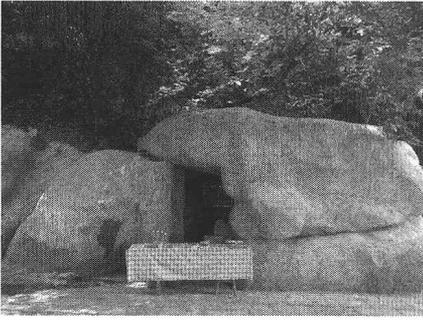
13 黄道長、背景は酥醪観

14 説明風景

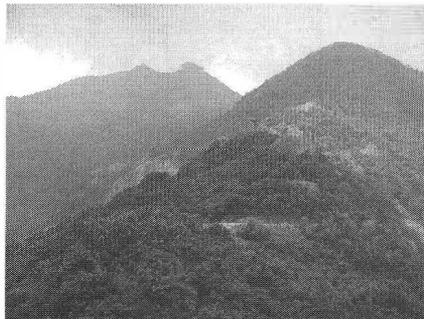
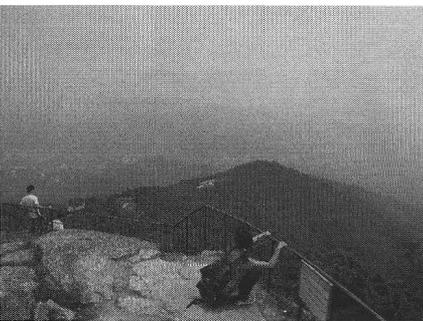
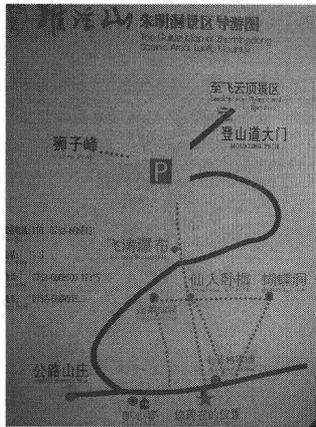
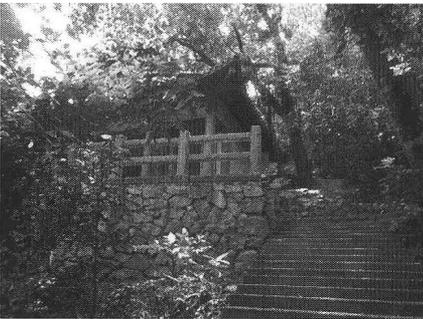
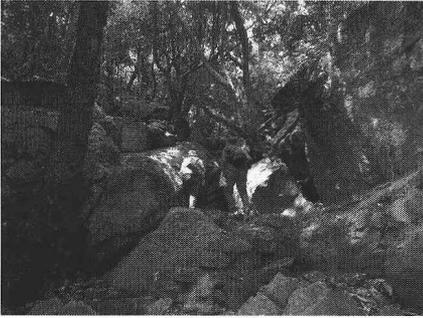


- 15 羅浮山風景区地図
- 16 白蓮湖から羅浮山を望む
- 17 会仙橋
- 18 冲虚観
- 19 冲虚観三清寶殿
- 20 冲虚観葛仙寶殿
- 21 稚川丹竈
- 22 朱明洞入口付近





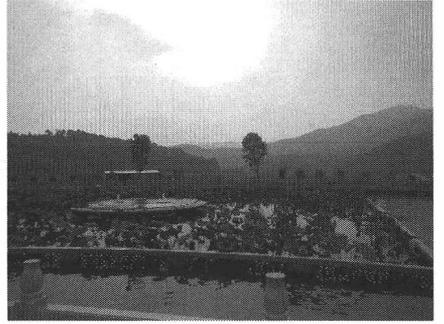
- 23 胡蝶洞
- 24 胡蝶洞
- 25 泉源洞への道
- 26 泉源洞入口
- 27 蓬萊洞入口
- 28 現地示意图
- 29 伏虎岩からの眺望
- 30 伏虎岩から羅浮山頂
方向の眺望



31 伏虎岩へ登るロープ
ウェイ



32 酥醪観門前から羅浮
山の北方に続く山々が眺め
られる



33 酥醪観

34 中央に「神霄寶殿」、
左右に「葛洪北庵」「純陽
寶殿」が並ぶ。

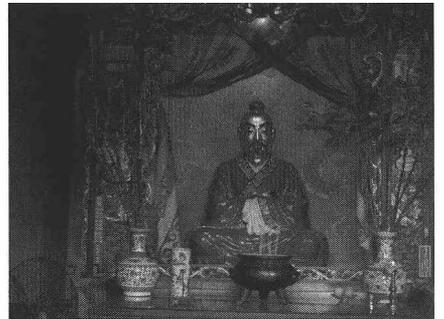


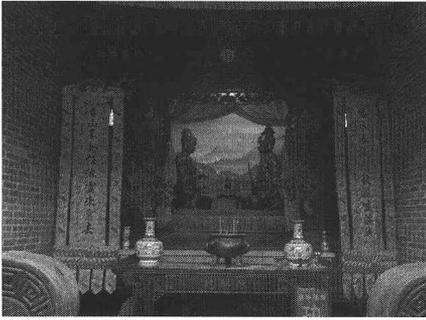
35 雷祖

36 葛洪

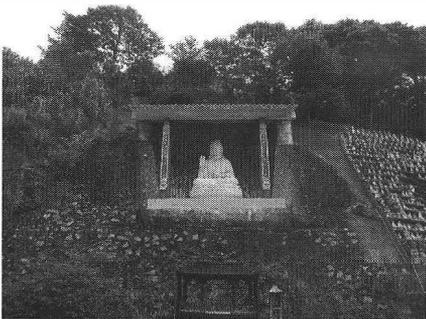
37 呂祖

38 何仙姑

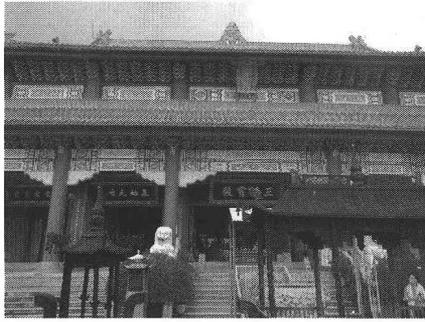
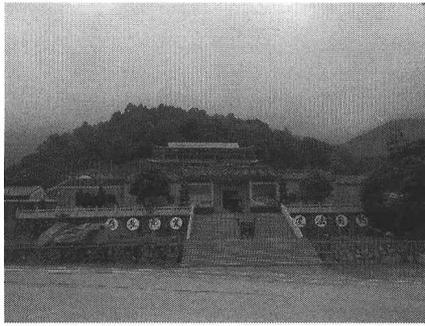




- 39 安期生
- 40 張天師
- 41 華首寺入口
- 42 華首寺境内の観音
- 43 華首寺大雄寶殿
- 44 華首寺百羅漢殿
- 45 境内裏、各家の事情で廃棄すべき観音等の神像を安置している（右手の白い小像の列）



- 46 黄龍宮
- 47 黄龍宮境内から羅浮山を仰ぐ
- 48 黄龍宮三清寶殿
- 49 同前
- 50 黄龍宮三師寶殿
- 51 黄龍宮境内から羅浮山を仰ぐ
- 52 南楼寺山門
- 53 南楼寺大雄宝殿



結び

羅浮山は、括蒼山とともに、東嶽泰山あるいは崑崙山と関連づけられている

*14

また、『真誥』卷十一「稽神樞第一」に「句曲洞天、東通林屋、北通岱宗、西通峨嵋、南通羅浮。皆大道也」とあるように、茅山を中心とした東西南北のネットワークに位置づけられる。茅山に降臨した魏夫人は、東晋の天師道や王屋山と関係が深い。葛洪（茅山周辺出身、鍊丹の薬物を求めてベトナムを目指し羅浮に止まって鍊丹したと伝承）や白玉蟾（羅浮で陳楠から内丹と雷法を伝授、武夷山などを拠点に各地を遍歴）の足跡や活動地域については本稿で見た通りである*15。

王屋山に発した洞天信仰の原型が魏夫人信仰とともに江南へ伝わり、茅山での魏夫人や神仙の降臨をもとに形成された上清經典の中で発展したと考えることができる。やはり茅山近辺の葛氏の鍊丹の伝統は、植物や鉱物などの材料を求めて、南方の羅浮やベトナムや東南アジアとの交易ルート（東南アジアから海南島を経て中国南方の沿海部に至る海上の交易ルートは古くから有名である）に関係していたと推測される。葛洪が鍊丹の材料をベトナム地域にまで求めようとしていたことは、すでに触れたように、その伝記や『抱朴子』の記述からうかがい知ることができる。また、呉の孫権が交易を目的に扶南（現在のカンボジア地域）へ使者を派遣したという記事が『梁書』諸夷伝にあり、この時の使者である朱応と康泰による記録である『扶南土俗』の逸文が『太平御覧』などに散見されることは広く知られている。そしてカンボジア地域を支配した扶南や真蠟は、インド地域やインドネシア地域とつながった交易圏の中で重要な位置を占め、金銀を含む豊富な物産を扱っていた。

宋代には、白玉蟾のように羅浮と武夷を重要な拠点としながら南宋の諸地域を遍歴するような修行者もいれば、宗教的な景勝地を遊覧する目的で都から羅浮までやってくる士大夫や文人も存在した。当然ながら一般庶民の巡礼やお参りも盛んであり、それを目当てとする観光産業的な経済活動（宿泊・商売・巡礼ガイドなど）も存在していたと考えられる。こうしたことは、現在進行中の洞天福地など古来の宗教聖地の観光化やいまや多くの世界遺産を有して猛烈な勢いで発展している中国全土の観光開発の状況とあわせて考察すべき課題であるが、これについては稿を改めることにしたい。

注 14…例えば『雲笈七籤』卷一百九「神仙傳 蔡經」「經父母私問經曰、王君常在何處。經答言、常治崑崙、往來羅浮山括蒼山、此三山上皆有宮室。」また『歷世真仙體道通鑑』卷之五「蔡經」。

注 15…白玉蟾「博羅縣驛」「虎嘯月生海、猿啼風撼山。夢回三鼓盡、身自九天還。雲氣浮窗外、泉聲入枕間。問心宜富貴、為復要清閑。」『精華』白玉蟾全集・下 650 頁。「張道士鹿堂」「清夢繞羅浮、羽衣延我游。新茶尋舌雀、獨芋煮鷓頭。春鶴飲藥院、夜猿啼石樓。丹爐猶暖在、聊為稚川留。」『精華』白玉蟾全集・下 651 頁。「又題羅浮山」『精華』白玉蟾全集・下 1062 頁。「又羅浮作」『精華』白玉蟾全集・下 1108 頁。「又羅浮賦別」『精華』白玉蟾全集・下 1125 頁。

【茅山を中心とする洞天ネットワークのイメージ図】

王屋山（王褒・魏華存・第一洞天）

【泰山】

|

（北）

|

【峨嵋山】 — （西） — 【茅山】 — （東） — 【林屋山】

天師道

魏夫人

上清

葛氏（鍊丹）

|

（南） 括蒼山

|

武夷山（白玉蟾）

【羅浮】（葛洪・陳楠・白玉蟾）

|

海南島

ベトナム

カンボジア

東南アジア

※本稿は専修大学研究助成「宋代の道教文化における聖地・儀礼・思想」（平成21年度）、「宋代道教における聖地・儀礼・思想」（2）（平成22年度）の成果の一部である。